

石原プロで製作された『栄光への5000キロ』（1969年）は前述の通り興行収入650百万円の大ヒット作でしたが、翌1970年公開の『ある兵士の賭け』の不評で、これを契機に精彩を欠くことになってしまいます。確かに『栄光への5000キロ』は日活を辞してフリーとなった、以前から裕次郎作品を数多く手掛けることの多かった、蔵原惟繕の大胆なカメラ・アングルやカメラ・ワークから生まれる流麗にして端正な映像美を作り上げた日本映画離れした作品でした。（撮影は金宇満司）しかし、『ある兵士の賭け』では、アメリカ軍大尉が児童養護施設の建設資金のために1300キロを歩くという実話ベースのヒューマニズム・人間愛ドラマですが、アクションや娯楽性を期待していた従来のファン層を惹きつけることができませんでした。さらに撮影中にはスタッフ・監督間のトラブルや降板劇が相次ぐなど（千野皓司監督と中井景プロデューサーとの衝突で千野皓司監督は降板、以降劇場用映画を撮ることはありませんでした）、製作過程で多くの混乱があり予算が大きく膨れ上がり結果として5億円から7億円とも言われる巨額の赤字を出し、石原プロは深刻な経営危機に陥ることになります。石原プロなら裕次郎という大スターを主演・プロデュースに据える以上は、作品には常に一定のスケールや社会的・国際的な大義といったものが求められました。ということは、低予算の文芸作や、市井の人間を主役にした小規模なサスペンスといった、のちのATGが手がけるような、小粒でもエッジの効いた実験的・芸術的企画には舵を切りにくい体質であり、次から次へと低～中予算の作品を企画せざるを得なくなり、若手監督や脚本家を育成しながら、ローテーションで映画を量産・公開する仕組み（プログラムピクチャーのインフラ）がありませんでした。そして、ここからは1本の映画に会社全体の命運を賭ける「大作一本勝負」にならざるを得ず、リスクを分散しながら「小さく生んで大きく育てる」という映画ビジネスが困難だったのです。結果として、映画界での「小粒で光る作品」へのシフトではなく、媒体そのものをTVドラマへ大胆にシフトすることで、石原プロは息を吹き返します。

この1960年代後半から1970年代初めの、石原プロ、三船プロ、勝プロ、中村プロといったスタープロが展開した映画制作は、日本映画史において大手の旧システムを破壊した輝かしい革命でありながら、映画ビジネスとしては持続できなかった壮大な徒花であったと総括できるのではないのでしょうか。トップであるスター自身の「作りたいもの」「見せたいもの」が最優先されるため、客観的な観客のニーズの分析やコスト管理が二の次に迫りやられました。また、映画会社のように「低予算の小品で手堅く稼ぎ、その利益を大作につぎ込むというリスク分散なりポートフォリオ経営が出来ませんでした。常に自社プロの命運を賭けた全賭けのギャンブルになり、1本の失敗（石原プロにおける『ある兵士の賭け』勝プロにおける『顔役』など）が即致命傷となりました。永続する映画制作会社になれず、最終的に石原プロと三船プロがTVドラマ制作に活路を見出し、勝プロと中村プロは倒産に追い込まれてしまいます。プロセスを

見れば映画制作集団としてのスタープロは時代の一過性の徒花であったと言わざるを得ません。しかし、彼らが命を削って証明した「スター自らがリスクを背負い、作りたい作品のために大資本と対等に渡り合う」という独立プロの精神は、後の日本映画界における「製作委員会」方式の原型や現代のインディペンデント作品、クリエイター主導の映画制作へと脈々と受け継がれたものと考えられるのです。決して無視できない決定的なターニングポイントと言えるのです。

スタープロの勢いも陰をひそめた1970年から1973年までのキネマ旬報ベストテンから1位から5位までの作品を並べてみることにします。全般的な印象からすると、独立プロの作品の割合が多くなったのが特徴として挙げられます。創造社、斉藤プロ、表現社、現代映画社、えるふプロは、それぞれ大島渚、斉藤耕一、篠田正浩、吉田喜重、熊井啓（プロデューサーの大塚和との設立）といった映画監督たちの独自のプロダクションであり、新星映画は歴史的に見ると東宝争議で東宝を退社した映画人や労働組合の幹部らが共同で創立したプロダクションです。当時の日本映画界の概況を「作品の傾向は種々雑多。そのできあがりも玉石混淆であったが、独立プロが活性を見せたのに対し、邦画五社の作品の画一化には一層の拍車がかかった」とのと解説しています。こうした作品群を改めて目にするると一際感慨に耽ってしまうのです。

順位	1970	1971	1972	1973
1	『家族』 山田洋次 (松竹)	『儀式』 大島渚（創造社=ATG）	『忍ぶ川』 熊井啓 (俳優座=東宝)	『津軽じょんがら節』 斉藤耕一（斉藤プロ=ATG）
2	『戦争と人間』 山本薩夫 (日活)	『沈黙』 篠田正浩 (表現社=マコ・インターナショナル)	『軍旗はためく下に』 深作欣二 (新星映画=東宝)	『仁義なき戦い』 深作欣二 (東映)
3	『どこですかでん』 黒澤明（四騎の会）	『婉という女』 今井正 (ほるぷ映画)	『故郷』 山田洋次 (松竹)	『青幻記』 成島東一郎 (青幻プロ=東和)
4	『エロス+虐殺』 吉田喜重 (現代映画社)	『戦争と人間』第二部 山本薩夫 (日活)	『旅の重さ』 斉藤耕一 (松竹)	『股旅』 市川崑（崑プロ=ATG）
5	『地の群れ』 熊井啓 (えるふプロ=ATG)	『いのちぼうにふろう』 小林正樹 (俳優座=東宝)	『約束』 斉藤耕一 (松竹)	『恍惚の人』 豊田四郎 (芸苑社=東宝)

*訂正 4月28日号「日本映画界の五社協定とスタープロの出現 (2)」の「1967年~1971年の主要作品」中で、勝プロ作品の勅使河原宏監督作品『燃え尽きた地図』（大映）の記載が洩れていました。お詫びして訂正します。